

おかえ 柏崎市丘江遺跡現地説明会資料

資料 NO

平成 26 年 9 月 20 日 (土)
国土交通省 北陸地方整備局長岡国道事務所
公益財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
(株)吉田建設

1. 遺跡の概要

丘江遺跡は、柏崎市田塚 3 丁目字丘江地内に所在します。鯖石川左岸の扇状地末端に立地し、標高 6～7 m を測ります。一般国道 8 号柏崎バイパスの建設に伴い、今年度の 4 月から発掘調査を進めてきました。遺跡の全体面積は約 50,000 m² を測り、その内 9,750 m² を今年度調査していく予定です。

この遺跡では中・近世(上層)、弥生・古墳時代(下層)の 2 枚の文化層が確認されています。現在は上層の調査中です。出土遺物から時中世は 13～15 世紀(鎌倉・室町時代)、近世は 17 世紀中心(江戸時代)で、2 時期にわたり集落が営まれていたことが分かりました。

2. 基本層序

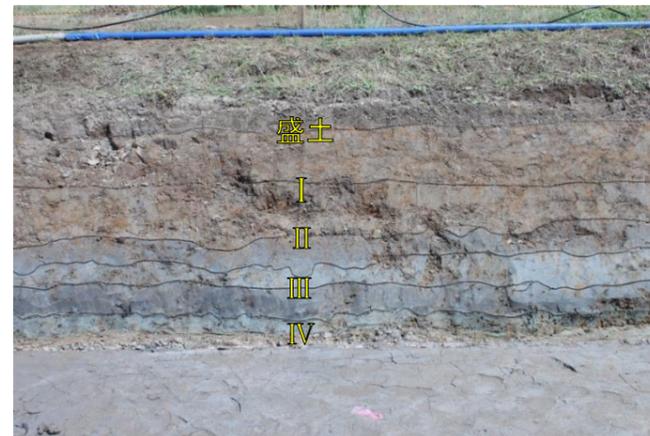
- 0 層 盛土(住宅造成) など
 - I 層 表土・耕作土
 - II 層 中世・近世の遺物包含層(上層)。厚さ 20 cm。
 - III 層 弥生時代後期～古墳時代前期の遺物包含層(下層)。厚さ 20 cm
 - IV 層 中世・近世、弥生時代後期～古墳時代前期の遺構検出面。
- * 1 区北寄りで確認されます。

3. 調査区

今年度の調査範囲は、道路や水路で区切られています。そこで右の図面のように、1～3 区に分けて呼んでいます。



丘江遺跡の位置と周辺の主な遺跡



基本層序

4. 1 区の遺構

概要

調査区は、東西に横断する用水路を境として「1 区北」、「1 区南」と呼んでいます。1 区の微地形は南から北へ緩やかに傾斜しており、標高のやや高い南側に遺構が多く分布しています。

1 区南は標高がやや高く、掘立柱建物、井戸、土坑、溝、柱穴などの集落に関わる遺構が多数見つかりました。隣接または重なり合う柱穴が多く見られることから、何度も建物を建て替えていたと想像できます。現在建物は検討中ですが、規模が 2.3m×4m のもの、3.9m×5m 以上(市道下に延びるため正確な規模は不明です)のものなどがあるようです。

一方、1 区北ではそれほど多くの遺構は見つかっていません。また、自然流路が調査区の 3 分の 1 ほどを占めています。この自然流路は旧葦藪川で、明治時代の土地更正図(土地の境界や建物の位置を確定する地図)に図示されています。明治時代以降に葦藪川を南へ移し、流れを直線的にして、そのあとを水田としたようです。

井戸(略号: SE)

本遺跡の特徴の一つは井戸の数が多いことです。現在、遺跡全体で 96 基の井戸が見つかり、いずれも井戸側(井戸の壁の土留め)を持たない素掘りのものです。深さが 1.5m 以上のものも多く見られます。井戸底からは柄杓や曲物、板材などが出土しています。また、人頭大の焼けた礫を多数投げ込んだものも確認できます。井戸は、柱穴が密集するか所で見つかることから、建物近くに掘られていたものと考えられます。



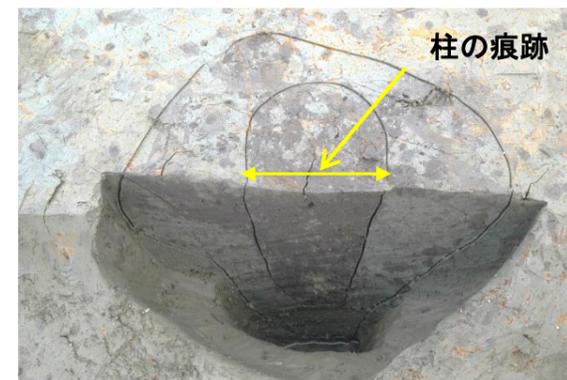
焼けた礫が投げ込まれた井戸



木製品(鋏)出土状況

ピット(略号: P)

掘立柱建物の柱穴です。遺跡で最も多く見られる遺構です。単体ではなく複数で組み合わせたり、一棟の建物を構成します。建物を使用しなくなった時、柱はそのままにされるか、再利用するために抜かれるかになります。地中に残された柱が腐ると「柱の痕跡」が残ります(写真左下)。腐らなければ柱そのもの(「柱根」)が地中に残ることになります(写真右下)。そして穴から柱が抜き取られると、「柱の痕跡」も「柱根」も残りません。



柱の痕跡が残るピット



柱根が残るピット

5. 2区の遺構

概要

大小の溝に区画された中に掘立柱建物・井戸・土坑・柱穴などが見つかりました。調査区を南北に縦断する大溝の東西で、遺構の様相が異なることが特徴です。東側では規模の大きな遺構が目立ちます。対して、西側では東側に比べ小規模な遺構が多く見受けられます。

出土した土器や陶磁器は、1区が中世と近世のものが混在するのに対し、2区では中世（13～15世紀）を中心とする珠洲焼と土師質土器が大部分を占めます。時代によって住む場所が変わっていったかもしれません。

掘立柱建物（略号：SB）

東側では小溝に囲まれた中で掘立柱建物を検出しました。南東部分が市道下へ延びるため正確な規模は不明です。柱穴は径40cm、深さ50cmほどで、それぞれの柱間が2m前後開いています。大溝の西側で見つかった柱穴に比べ、規模の大きいことが特徴です。この他に方向の揃う別の柱穴もあることから、溝の内側で建て替えをした可能性があります。小溝は建物から約1mの間隔をおいてL字状に巡ります。規模は幅約1m、深さ約30cmを測り、断面形は逆台形です。大部分が調査区外のため部分的にしか見つかりませんが、おそらく建物を囲っていると考えています。小溝内からは土師質土器や珠洲焼が出土しました。小溝の北と西は約3mの遺構空白域を挟み、規模の大きい溝がそれを囲むように掘られています。幅約3m・深さ約70cmを測り、断面形は逆台形です。この2つの溝に挟まれる範囲は遺構が少ない遺構の空白域で、道や通路としての利用が考えられますが、今後の調査や整理作業で検討していく予定です。



堀で囲まれた掘立柱建物
（人が立っている所が柱穴の位置です）

6. 遺物

中世（13～15世紀）の珠洲焼や土師質土器、近世初期（17世紀）の唐津焼などの肥前系陶磁器をはじめ、井戸の中から曲物や柄杓といった木製品が出土しています。珠洲焼は、現在の石川県珠洲市で生産され、能登半島から北海道に至る日本海沿岸地域に広く流通した陶器です。また唐津焼は、現在の佐賀県唐津市に朝鮮の技術が伝わり、生産された陶器です。窯の中で皿を重ねて焼く時に、製品同士の癒着を防ぐための技法（砂目積み技法）が見て取れます。（写真右下、17世紀前半）。



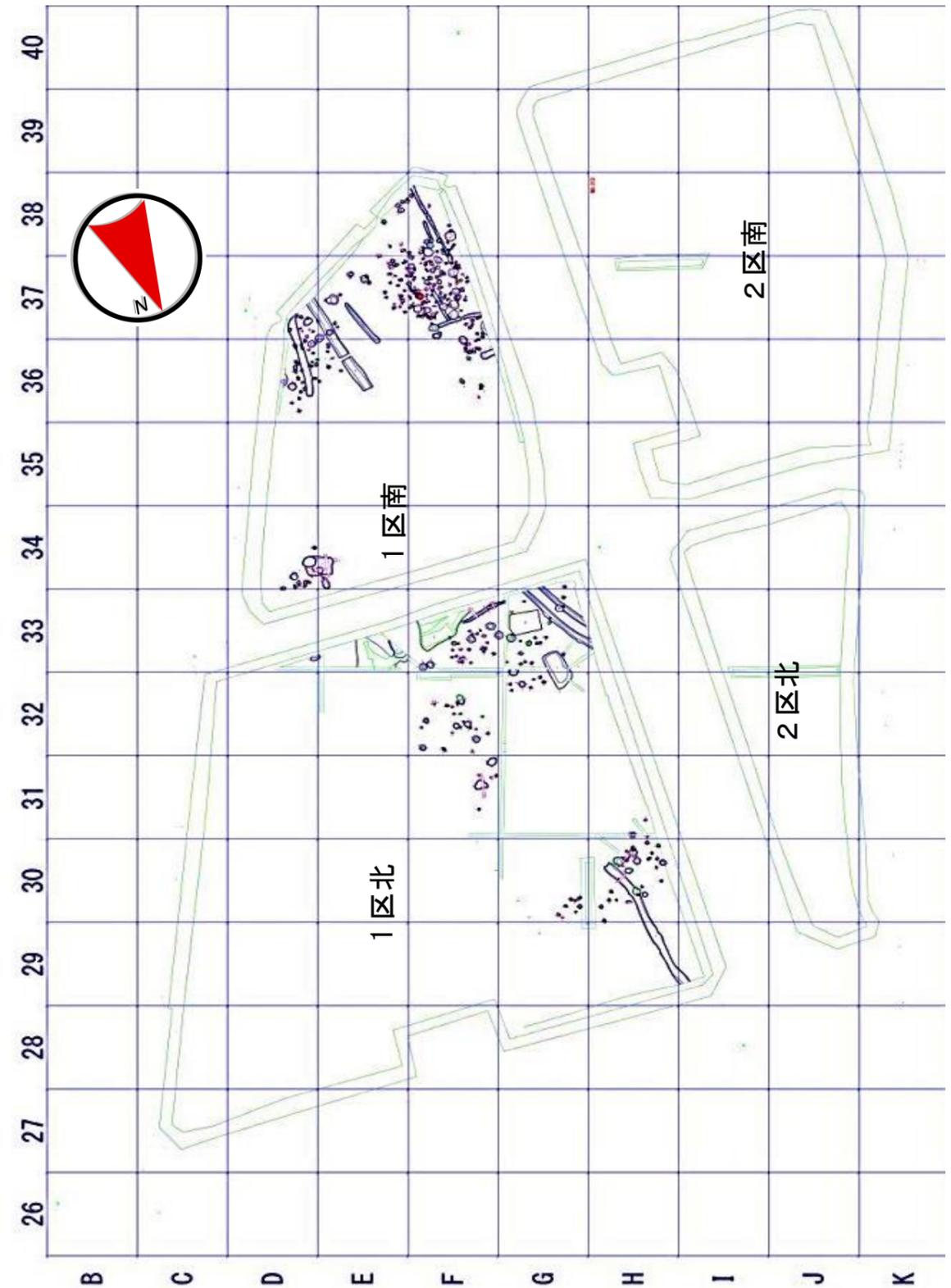
中世の土師質土器と珠洲焼



唐津焼（皿）

7. まとめ

中世（13～15世紀）と近世（17世紀）の集落遺跡であることが分かりました。柱穴や井戸の多さから、建物の建て替えや井戸の掘り直しを繰り返していたようです。今後、近隣に位置する同時期の集落である山崎遺跡、水田跡である宝田遺跡の調査成果を踏まえ、関連性を検討することで、柏崎の中世の様相が一層明瞭になるものと考えられます。



丘江遺跡の遺構平面図